

老健施設のリスクマネジメント

認知症利用者が窓からの転落により死亡

～支援の基本から対策を考えましょう～

2019.6.24 Vol.2

発行者：MS&ADインターリスク総研

■RMから考える再発防止策■

前号の「検討のポイント」を踏まえ、本件事案の再発防止策を検討します。

1. Y施設は対策をとっていたのになぜ過失が認められたのか？

本件は**認知症専門棟**で発生した事故であり、それ故に離設防止対策については通常の施設よりも**高いレベルでの予見**が求められていたといえます。その上で、以下の点がポイントとなります。

(1) ストッパーの取り付け方法および使用方法が、説明書に記載されていたものと異なっていた。

使用していたストッパーは窓がある程度開く状態で使用することを想定されておらず、現場検証の結果、繰り返し窓を当てることで容易にずらすことのできるものであったことが判明。

(2) 食堂の窓の付近に踏み台となるキャビネットが設置されていた。

上記の2点から結果として、実際に認知症利用者が窓から外に出られる状態であったことから**工作物責任**が認められました。

事業者は離設防止のための対策を取っていたとしても、その対策が適切なものか、実効性があるかという検証が必要です。特に本件で争点となったストッパーのように、施設が独自の判断で設置したものについては、設置や運用についても慎重に行わなければなりません。

2. 施設・職員が取りうる対策について

本件の被害者は**ショートステイ利用者**であったこともポイントです。ショートステイ利用者の場合は、入所利用者と比較して普段の様子が施設としても把握しづらいため、利用時にはより丁寧なアセスメントを実施するとともに、施設の安全確保の限界についても、事前にご家族等に説明をすることが必要です。

■Step Up■

認知症利用者の行動・心理症状（以下、BPSD）については、どの施設でも対応に苦慮されているのではないのでしょうか。

徘徊や多動といった症状に対し、施錠やカメラ・センサーの過剰な設置等の行き過ぎたハード対策を行うことは、不適切ケアや虐待にあたる可能性があります。また、ハード対策に力を入れているが故に、職員が「離設はしない」と思い込み、実際に事故が発生した時に対応が遅れてしまうといったように、対策がかって逆効果になってしまう場合もあります。

利用者の安全や健康に気を配りながら日々の多忙な支援業務を行っていく中で、つい忘れがちになってしまうのが利用者の**「個別的対応」と「受容」**です。こうした基本的な対応を丁寧にを行うことが事故予防に繋がっているということを忘れてはいけません。

なぜ、これらが事故予防に繋がるのか再確認してみましょう。

その上で、事故予防に向けた取組として、ハード対策とともに日頃の支援の見直しを実施していただくと良いでしょう。

【個別的対応】

利用者は生活歴やその身体状況等から、個別にニーズを持っています。しかしながら、集団生活の場においては、支援する側も効率性や合理性を優先してしまいがちです。もちろん効率性や合理性を追求することは、限られた業務時間の中で支援を行う上で必要なことですが、個々の利用者が持っているニーズに応えていく工夫が必要です。

【受容】

BPSDはケアをする介護者にとって負担の大きいものですが、本人にとっても不安感や自己喪失感など苦しみが強いです。症状に対しては、頭ごなしに否定したりせずに発現する原因を考え、その行動の背景にある本人の気持ちを探ることが重要です。

本人が心身ともに安定した生活を送ることがBPSDの軽減に繋がるといわれています。利用者の表面的な行動に振り回されるのではなく、本人の真のニーズを探り落ち着いた生活を送れるよう支援すること、すなわち**支援の質を上げていくことが事故予防にも繋がっていく**のです。